

獨逸通信

小田大吉

目下在外研究員として滞獨中の小田助教授より私への第4通信である。第3信迄は私の同門會雜誌に發表したが、一般にも興味があると思はれるので、敢て本誌に掲載を乞ふた次第である。

田中文男

田中先生 12月15日 ハンブルヒにて

先生、

段々寒くなりまして中耳炎の多くなる時期になつて参りましたが、先生には毎日お忙しくお通しの事と存じます。私はお蔭様で元気に見學を續けて居りますから、他事乍ら御放念を願ひます。

先月28日キールから當地に参りました。Wittmaack 教授の都合を聞いて翌日教室にお訪ねしました。寫眞や論文を通して想像してゐたよりも優しく見える方ですね。何處か上坂教授に彷彿たる所がありますね。目下非常に忙しい由で引見はあつと云ふ間に終つてしまひましたが、暫らく研究室で標本を見せて貰ひ、又臨牀で見學をする許可を得ました。朝8時半から病室の廻診があり9時から外來に來られて、興味ある患者、注意を要する患者に就て報告を受け(主として難聴の患者の様です)10時半から目下施行中の試験があり、Wittmaack 教授には一番忙しい時期ださうです。研究室は翌日見せて貰ひ、其以來主として研究室の方に通つてみますが、初めて行つた日に「ラボランティン」が二人とも小生の名前を知つて居り(これは論文の整理をするかららしいのです。小生の電氣の論文の獨逸語が滑稽だと云つて笑つて居ました。「それは自分で書いたと云ふ證據だ」と申しますと、「そうだそうだ」と云つて居ました)

『Wittmaack 教授から貴下が見えたら何でも見せる様にと云はれてゐるから、何でも希望のものを云つて呉れ』と云つて、洋服を入れる「シュランク」をあけてくれるやら、仲々親切でした。2人とも『田中教授は2、3度見えたから能く知つて居る。大きな立派な白い髪の方だらう』と云つて居ました。こんな工合で毎日行つて初めは朝外來を見て、見るものがなければ研究室に來る様にして居ましたが、何しろとても澤山の標本なので、この方を主にした方が、收穫が多からうと思つて、今は主として研究室に通つて居ます。朝行つて研究室の人(と云つても「ラボランティン」二人だけ、教室員は色々SS, SAのDienstに忙しく研究はしない由です。これがWittmaack 教授の假きの種の由、「ラボランティン」が云つてみました)と晝食も一緒にして、夜は9時か10時迄標本を見てみます。研究室は、これは先生御覽になつた事と存じますが、仲々よく整頓して居ますね。顯微鏡の標本を二人の「ラボランティン」が毎日毎日切つて居ますが、毎年50位切るさうです。ウエルネル君はハンブルグには、顯微鏡は連續切片が600はあると云つてみました。切つて居る番號を見ると757でした。そして之は小生希望の標本を出しに行く時に見たのですが、地下室の「シュランク」には、Wittmaack 教授がグライフスワルドの助手だつた頃からの標本があり、之を合せると800以上になるさうです。そして夫が皆索引簿に記載されて居り、その索引たるや又疾患別、實驗別になつて居り、私が何を見たいと云つても、直ぐ索引簿を見れば取り出せる様になつて居るのには、全く驚きました。「マツベ」には主な所見が記載されてあります。

標本は實に立派ですね。これ迄論文を読んでみて、Wittmaack 教授の主論は可成り無理もある様に思ひましたが、これだけ澤山立派な標本を持

つて見ると、少し無理な事も云つて見たくなるかも知れないと思ひました。「今は時間がないが、來週になれば時間を造つて質問に應じるから」と云ふ事ですから、「お邪魔をしてはいけないから、おかまひにならないで下さい、又お邪魔にならない時を伺つて出直して來ても良いから、その時少し教へて頂きたい。今度は標本を見せて頂くだけで結構です」尙「始め10日程御邪魔したいと思つたが、もう少しをいて下さい」と申しますと、「何時迄でも居て呉れ」との事で、「クリスマス」前迄腰を据ゑて標本を見せて貰ふ事にしました。

尙、標本製作上氣の付きました事は

1. Celloidin の代りに Photoxylin と云ふものを使つて居ります。但しこれは安いから(Celloidin の 殆) 使つて居る由で、人の顛顚骨には差支へないが、動物の標本を作るには向かないさうです。

2. Wittmaack の固定液を使つて居るのに岡山で同じ液で固定して染めたものよりも「ヘマトキシリン」の色が鮮かに出て居ます。よく聞いて見ると Wittmaack の液を、岡山でやつた様に取り替へないさうです。

3. 動物の斷頭固定の標本を見ましたが、私がこれ迄考へて居りましたよりは、餘程よく出來て居り、成程これならば Wittmaack 教授が斷頭固定の利點を強調される筈だと思ひました。

尙、これは話が前後しましたが、この研究室で切つてゐる標本は耳鼻科で死亡した患者だけでなく、他科のもので病理に廻つたものも Wittmaack 教授に知らせがあつて、其の内教授の興味をもたれたものは大抵貰へる由、又近頃は他の科の患者でも死にさうになると聴力検査を行ひ(殊に難聴のある患者など、そして「ゼクテオン」があると直ぐ貰ふのださうです。尙この精神科では外科醫の助手……外科教室の助手ではありません精神科の助手です……)が居て「ヒルンツモール」の手術を

してゐるさうです。その材料も貰つて來る由です。小生も手術があれば見せて貰いたいのであります。そしてこんなにして、他の科の患者で検査した成績を朝外來で矢張り先生に報告して居ます。そして「プロトコール」の上で、先生の診断なり意見なりを纏めて「ゼクテオン」の際對照する様にして居ます。大變な努力だと思ひました。(尙他の科の患者でも、この死前に聴力検査をやつて死後これを對照する事は アメリカ の Crowe 教授の所でもやつて居る様ですね。こうして集めた材料について、仲々良い仕事が報告されて居るのを先日雑誌で讀みました。) こうして集めた材料を「ラボランティン」が連續切片にして居るのですが、毎日毎日切つて居ますし、(多くの標本を作つてゐるとは云へ、實に鮮かな手つきで速く切つて居ますのには感心しました。又澤山固定中のもの、脱灰中のもの、包埋して乾燥中のものが随分あります。唯、Wittmaack 教授の興味はもう聴器だけの様で、他のものは餘り有りません。私は先づ「オトスクレローゼ」乳嘴突起炎(これは Operation をしないものがどうしたものか澤山あります。「プロトコール」を見るとやつて來て間もなく死んでは居ますが)、從つてこれ迄見た事もない硬腦膜外膿瘍とか硬腦膜外から腦膜内に移行する機轉とか乳嘴突起炎の際の血管の状態とか實によく分ります。Labyrinthitis, Labyrinth bei Hirntumor, Tuberculose, Lues, Pneumatisationsfrage の材料、Cholesteatom(これも Operation をしてないものが随分あります。最も之は耳性のもので無く他の原因で死亡したのが澤山あるからです)。圖書室で雑誌を讀んでみますと「ゼクレターリン」が入つて來て、何處に何があるとか、索引はどれだとか能く教へて呉れます。方々から送られた別刷迄、物件と人名によつて綺麗に整理されて居るのには感心しました。「ゼクレターリン」が小生の論文を

出して見せて呉れます。見ると Eigentum, Prof. Wittmaack と云ふ印が捺して Referat には鉛筆で筋がひいてある。聞いて見ると Wittmaack 教授が瀧んで自分で筋をつけられたとの事でした。先頃送つて頂いた私の「クロロホルム」の論文も見ました。その他岡山の教室の諸君の別冊を出して見て懐しく思ひました。

その他尙動物實驗の標本も見せて貰ひ、後で例の Hypo-und Hypertonische Degeneration の問題並に死後變化に関する意見を尋ね度いと思つて居るのですが、先づこうした順序に見様として居ると、次から次と標本が出来て来て、Wittmaack 教授が見て終はれると直ぐ簡単な説明をつけて、『小田に見せてやれ』と廻つて来るので、又其の方を見たり随分忙しいですが、仲々勉強になります。これ迄見ましたものは

1. Otoklerose

隨分澤山あります。44 例あるさうです。大體 Fenster-Otoklerose が多いですが、近頃は臨牀的に Otoklerose と診断されたもの以外に、一般的のものもよく検査し組織的に診断するので Kapsel の Otoklerose も可成りあります。Otoklerose は Lange 教授の所でも見せて頂いたので、又この圖書室で Wittmaack 教授の意見、Lange 教授の意見、O. Meyer 教授との論争等讀み乍ら見ましたが實に有益でした。尙、例の鶏の Otoklerose の標本も見せて貰ひましたが、之は初め見た時には實に人間の Otoklerose とそつくりで、どうして Meyer があんな事を云つたんだらう、之なら Wittmaack 教授でなくとも立派な Otoklerose と思ふだらうと思ひましたが、serien で標本を全部通覽しまして少しく疑問が起りました。

ウィーンに行つたら、Meyer 教授の標本を見せ

事を書きましたが、之等の澤山の材料を見せて頂いて實に良い勉強になりました。尙先日「一寸時間があるから質問を聞いてやらう」と研究室に来て下さつたので、丁度其の時 Otoklerose に引懸つて居りましてこの内耳の變化及び Otoklerose の際の神經性難聽の本態に就いて、疑問を持ち乍ら見て居りましたので、夫に就て聞きますと之は Wittmaack 先生のお得意の所であつたらしく、とても上機嫌で教授の所謂 Hypertonische Cochleardegeneration の所見のある標本に就て、これは Otoklerose の Herd より何か刺戟物質 (Ca であらうと實驗的に Ca による變化を引用して) が迷路液に達してこの Hypertonische Degeneration を來すものと自分は考へるとの事、然し他に隨分反對に Hypertonische Degeneration の所見を以て居るものもありますが、それは何か他の前からあつた原因的疾患によるものだと説明でしたが、此の説明は餘り假説が多くないかと思ひ乍ら聞いて居ました。然し斯様な根據よりして Wittmaack 教授は今難聽の形によつて臨牀的に Otoklerose を Fensterotoklerose (定型的中耳性の難聽を有するもの) 及び Kapselotoklerose mit hypertonische Degeneration (即ち神經性難聽を有し然も上音階並に下音階共に侵されて居るもの) に分けて居られるとの事です。(この話を聞いて後で「ラボランティン」と一緒に食事をして居りますと『Professor, 貴下は Chef (西洋には日本の「先生」と云ふ言葉が無い様ですね、皆 Chef とか Professor とか云つてゐるから妙ですね) の話が解つたか』とききます、「どうして? 解つたよ僕は Wie? Bitte! を3度云つただけだ』と云ひますと、『だつて Chef が大きな聲で話してゐたから、Chef は相手か解らないと大きな聲になるんだ』と申します。どうもこんなに Wittmaack 先生に苦勞を懸けたかと思つて、これには閉口し

ました)。

2. 『小田に見せてやれ』と云ふのでどンドン持つて来る標本の内で、色々見ましたが、大變面白かつたのは、硬脳膜外膿瘍の際の硬脳膜の炎症の硬脳膜内への移行、色々な蜂窩、異常な發達等頭蓋内合併症への蔓延系路に關する所見を見た事でした。これは何しろ Operation をしない儘の標本が澤山あるので、實によく分りました。

尙『これは Arachnoideal Herma だ』と云つて Wittmaack 教授が硬脳膜又は Schafenbein の内に Subduralraum から挿入してゐる小さい「ボリープ」の様な形のを示され、尙古い標本を出して見ると、まだ5,6例こんなものがあり、然も之が Tegemen tympani の薄い骨中に入りこんだり、又その Dehiscenz を通して直接中耳粘膜炎の粘膜炎組織にくつついてゐたり、實に面白いものを見ました。又よく見ると之を通して腦膜炎の成立してゐるもののだ、又逆に蜘蛛膜下腔から靜脈竇壁に挿入してゐる、之を通して Sinus に傳染して竇血栓を起して居るのを見ましたが、教室にあります伊賀某の竇血栓の標本で血栓から Pachionion の肉芽を通して蜘蛛膜下腔に傳染して居るのを見た事を思ひ出して、これに就てはこれから少し注意して見様と思ひました。

尙「ムコーズ」耳炎で死んでゐるものでは、今年の學會で先生が御注意になつた部分に澤山蜂窩があり之に深在性膿瘍を持つて居るものが實に多い事 (Wittmaack 教授は特にそれを betonen して居られました) 又「ムコーズ」の標本で色々な定型的な、組織像を見た事も参考になりました。

3. 迷路を見る時には Stria と Reissner'sche Membran の關係を、注意して見てゐるのですが、腦膜炎が無くて然も Reissner'sche Membran の下つてゐるものの大部分では Stria に於ける變化が

ひどい。唯單なる死後變化と思へない事、又 Stria が健康と思はれるもので、Reissner'sche Membran の下つて居るものは大抵腦膜炎がある様に思ひます。教室の宮本君の Atoxyl の研究の成績に一致する様に思ふのです。どうも Wittmaack 教授の見方と出發點 (Liquorzusammensetzung の論文時代からの) とを離れて又新しい自由な點に立つて、此迄大な材料を見直したら又新しい見方がありはしないか等と、生意氣な事を考へ乍らこれを見ました。

4. 1 昨昨日 Brückenwinkeltumor (精神科で Operation をやつた例) の聽器が出来たと云つて、先生に見せる前に「ラボランティン」を見せて呉れました。見ますと腫瘍の性質は解りませんが多胞性の小さい囊腫で、それが右側は聽神經及び顔面神經内に侵入して、全く夫を侵害し、聽神經は螺旋神經節の中迄 (顔面神經は Knie 迄) 侵入して有髓神經纖維は全く無くなつて神經節も全く消失してゐるのに、「コルチ」器はちやんと保存されて唯明かに死後變化と思はれるものがあるだけです。(Crista と Macula は稍々不明ですが、多分死後變化と思ひます。之は後で Wittmaack 先生の意見を聞いて見るつもりです。) 實に面白く思ひましたので「ラボランティン」に、『岡山で高原と云ふのが兎で肉腫の材料を用ひて實驗的腦腫瘍の聽器の變化を研究したが神經と其の末梢器官との關係が、此例と全く一致してゐて面白い。然も之は又別の岡山での聽神經切斷による實驗の成績とも一致してゐる』と、話しますと (この婆さんとお嬢さんは、「ラボランティン」ですが、流石、偉い先生に鍛へられてゐるだけあつて仲々識見を持つてゐます) 『そいつは是非 Chef に話さない』と云つて居ました。

5. 目下 Cholesteatom の標本に取りかかつて居ます。少し本を讀み乍ら見てゐるのですが、此

處で Wittmaack 教授の意見をつかんで、又何時
 かも一度 Lange 教授の標本を見せて貰つて、
チュービンゲンのアルブレヒト教授（今年の國際
 學會で宿題をやりました）の標本を見せて貰つた
 ら、大體 Cholesteatom なるものが解ると思ひま
 す。Lange 教授はこの前『今度來たら組織標本を
 見せてやる』と云つて居られましたから、そんな
 に邪魔にならない時期を選んで行き、見せて貰ふ
 積りで、まだ途中ですが昨日はどうも之は眞性
 の Cholesteatom ではないかと思ふのを見まし
 た。（Wittmaack 教授の書いて居られる説明にも
 Wahre Cholesteatom と書いてありました）。

6. その他、色々ありますがとても限りがあり
 ません。

尙、臨牀の方では

1. Wittmaack 教授の Otosklerose Operation
 （これは主席醫の Rollin 君がやりました。Rollin
 君は小生と同じ位な年配です。初めはとつづきの
 良くない男の様に思ひましたが、仲々親切者らし
 く先週の土曜日は自分の家に連れて行つて晚餐に
 招いて呉れました。私は黄色の薔薇を 10 本買つ
 て、黒っぽい服に着替へて出掛けました。食後、
 醫局の連中もやつて來て、一緒に「ビール」を飲
 んで實に愉快でした。）又 Otosklerose の手術も
 見ました。之は Wittmaack 教授の例 Stauungs
 theorie に出發した手術で、N. petrosus superior-
 mayor に沿ふ靜脈を切斷して、之から Otosklerose
 の病竈への血液の還流を除かうと云ふのが、この
 手術の主眼の由、耳翼の上から入つて穿顔して中
 頭蓋腔底に達し、硬腦膜を擧上して Eminentia
 Arcuata の向ふに (Squama より約 4 cm) その神
 經が骨管より出て硬腦膜に移行する所を求め、之
 を骨から剃すと同時にその靜脈は離斷されます。
 Duraliftung と云つて居ます。この手術はもう 50
 例程やつて居ります由、成績を聞くと、(1) 耳鳴

は大抵良くなる、又は高調の音はあるがとても自
 覺的に樂になるとの事、(2) 難聴は進行が停止す
 る。（勿論良くはならない、95% と云ふのです）。
 それで此手術は難聴の進行中のもので、初期のも
 のにやる。又、兩側の内軽い方に行ふ、(聽力を保
 するの目的から) 又同程度の場合は耳鳴の甚しい
 方にやるさうです。尙目下進行しないものは、唯
 経過を見る事にして手術はしない由、此患者は直
 接、話をしてみたいと思つて居る内に退院しまし
 たが、看護婦に聞いて見ると「耳鳴が軽くなつた」
 と云つて居たさうです。但し Otosklerose は物が
 物ですから、どうも日本に歸つても直ぐ之をやつ
 て見様と云ふ氣になりません。然し、丁度手術の
 前日、Wittmaack 教授が鬱血があると云つて居
 られる、その血管を組織標本で見たばかりでした
 し、大變面白く見ました。中頭蓋腔底を上から見
 た事も——之は technisch には何でも無い事とは
 存じますが——Pyramidenbein の Spitze を操作
 する時の参考になりました。

2. Operation は大抵 Rollin 君がやつて居るら
 しく、又私は今研究室の方に熟中してゐますので、
 Wittmaack 教授の手術は先日前額竇の Mucocele
 の手術を見ただけです。前額竇を開くのには眉毛部
 全長に互る切線を入れてやつて居ました。

3. 大きな顳額葉膿瘍を切開して居ましたが、
 一度に膿汁を出さない方針だと云つて切開口に綿
 栓をして、朝夕之を取換へて少しづつ排出して、
 昨日位から「ゴム」の切れを「チガレット」の様に巻
 いて挿入してゐますが、獨逸に來て見ると近頃は
 大きな腦膿瘍を一度に排膿して、急に Kollabieren
 させる様な状態にすることを避けようと思ふ意見
 が大分ある様で、物には色々考へ方があると思ふ
 と共に、これ亦大變参考になると思ひました。
 (Daner tamponade 等も伯林ではさうした考への
 下にやつて居る様でした)。

Wittmaack 先生も初めは馬鹿に忙しさうでしたので、成可く人の邪魔にならない様にと思つて「標本を何でも見せる」と云つて頂いても、大分遠慮をして『Wittmaack 先生の邪魔をしては悪いから』と云つて居りますと、「ラボランティン」が二人とも「貴下の様に標本さへ出して上げれば、何でも獨立的に勉強して行ける人は、ちつとも邪魔になることはないし、來週になれば Chef も時間が空くだらうから、貴下と話をされるだらうから、遠慮なく必要なものを云つて呉れ」との事で、能く見ると實際餘り邪魔にもならない様ですから好意に甘へて夜は後で鏡さへ懸けて置けば、何時迄研究室に居ても、誰の邪魔にもなりませんし、尙 3、4 日目からは行く所もない儘に夜も残つて、以上の様に色々なものを見せて貰つて居ります。初めは一寸とつつき難いと思つた Wittmaack 教授も仲々親切で、先日は 1 日（この冬至近いハンブルグでは實に暗く、朝 7 時に起きる時は岡山のまるで 5 時半頃の暗さです。午後は 3 時には暮れかけ 5 時は夜です。陽の照る日は氣持が嬉しくなるのですが、霧の深い日等、晝の 12 時頃でもあの窓の多い研究室で、顕微鏡を見るのに人工光線を用ふる位實に憂鬱です。後で自分でもをかしくなつたのですが、その日、朝寝坊をして 10 時に目が覺めたのと、餘り暗いので妙に淋しくなつて終つて横着をしました）横着をして久し振りに手紙等書いて居ますと、午後「ラボランティン」から電話が懸つて来て『病氣ではないか、Rollin に行つて貰はうか、入院出来る様に部屋は準備してある』との事、之は恐縮しましたが、横着とも云はれず『有難う、今日は一寸少し風邪をひいたので、用心したのだが明日はもう行けるから』と云つたのですが、翌日行つて見ると Wittmaack 教授が心配された様子で、聞いて見ろ、誰かやつた方がよからうとの事で電話したとの事、之には内心赤面す

と共にその親切さに感謝しました。早速 Wittmaack 教授に御禮言上に及びました。

ハンブルグの街は、日曜日に 1 度市内週遊をやり、次の日曜日に港内週遊をやり（若い製藥會社の宣傳員だと云ふ藥學士と此「ホテル」で知り合ひになり、それで一緒に遊覽をやりました。仲々禮儀正しい若人で感心しました。）「ミカエリス」寺院の塔に上つて、霧と煙のハンブルグの街を見下しました。ハンブルグの古い市街は今や切り取つて改築中です。近代的な「ビルディング」、住宅が出来つつあります。然し又古い「ハンザシュタット」の昔を偲ばせる古い家屋は、仲々繪畫的な趣がありますね。大戦直後は共産黨の巢窟だつたと云ふ、古い小さい家のたてこんだ街を歩いて見ましたが、古い家と云ふものは見るには好いものです。議事堂の中を見て、「ハンザシュタット」、「フライエライヒスシュタット」の誇りを見た様な氣がしました。

「ラボランティン」は色々な事を話して呉れます。勿論ふんふんと聞いてだけ居りますが、Wittmaack 教授が他の獨逸の教授連中と面白くなく、嘗ては弟子であつた教授とも餘り好くない、今では唯ロストックの Steuer 教授位と好い位なものらしい様子が、その話の中によく解ります。そして、あれだけの「エネルギー」な仕事をしながら Pnenmatisation の問題に就ても反對があり、Otosklerose の實驗では可成り Einwand を入れられ、又、長年やつてみた Kupula の問題では、グライフスワルドの Steinhausen とひどい論争（ハンブルグに來てから、Steinhausen 教授から送つて貰つた論文を「ベッド」の中で読んで居ますが、ひどい論争ですね）をして、今は自分の論文さへ唯外國の雑誌にだけ發表してゐるこの老教授の姿を、（1 月 17 日で 61 歳になられる由）時には淋しい氣持で見るともあります。又こんなに材料

が有るんだから暫く腰を落着けたら、大分書く事は出来るし勉強にもなるなと思つたりもするのですが(先日も年とつた方の「ラボランティン」が云つて居ました。『Professor! 貴下はもつと長く此處に居ないか、Chefは喜んで貴下に材料を與へるに違ひないから』と云ひます。小生が『W教授は忙しい様子だから御邪魔したくないんだ』と云ひますと『貴下は一々Chefを煩はさなくつても自分一人で研究出来るんだから、それならChefも喜ぶだらう、自分達はこうして一生懸命に標本を作つてゐるが、今此處には誰も研究の出来るものは居ない、Chefの話は仲々Junge Herrenには難解で、Junge Herrenはとても研究に取付けない(Theorieが多いから、豫備智識がないとW教授の云はれる事が解らないらしいのです) Rollinも忙しいし、Rollinだつて一々Chefに聞かなければならないし(——この所Oberarzt形なしの體でした)能く考へて御覽なさい——』と云つて居りましたが、唯今の様に自由に見せて貰つて居るだけでも、「こんなに親切にされると後で反対意見が發表し難くなると困る」と云ふ様な氣持さへしますのに、此上、此教室に入れて貰つたりしたら一層困る、(私は、迷路の病變に就ては、何れ岡山の教室と此處とでは、大きな開きが出来ると確信して居ります。)と思つては唯見せて貰ふだけで満足したい。將來努力して材料を集めさへすれば、好いだからと考へたりして居ます。

尙又、Wittmaack教授は30年一日の如く、殆ど「ヘマトキシリン・エオジン」でやつて來て居られる様ですが、(少しのSekundäre Osmierungを除きては)方法をもつと攻究し、又各方面から物を見て行かないと、偏つた結論に陥り易いと思ひました。獨逸の學者は、一般に自分の専門以外の事に、色々廣い「ケントニス」を持つて居る人が多い様ですが、こんな國であり、然もこんな頭の

良い教授でも、物を餘り一方的に見ると、時にひどい「ドクマ」に陥る事があると云ふ事は、シュタインハウゼンとの論争でも見られると思ひ、自ら以て他山の石にしたいと思ひました。

一昨夜前頁迄書きまして、まだ昨夜書くつもりで、又もう新年ですから年賀の葉書を書いたり、方々に御無沙汰のお詫びを書いたりと思つて、昨夜は早く切り上げて5時半頃「クリスマスカード」を買込んで歸つて來ますと、「ボルチエ」が手紙を呉れます。見るとキールの「オーベル、アルツ」のリーケ君が「やつて來たが君が居ないから又7時半頃に來る」との事、待つて居ますと、奥さんと二人でやつて來て呉れて「クリスマス」の買物に來たんだよ」と云ふ事です。岡山邊から氣のきいた買物には、大阪に出掛ける様なものでせうね。「ホテル」で一緒に軽い夕食をとつて、「ラートケラー」に行つて「ビール」を少し飲んで、一別以來の話をしましたが、相變らず親切な人達で實に有難く思ひました。そして先日も手紙を呉れて、「クリスマス」には屹度ハッレの母の家に來い、そして「ジルヴェステル」にはキールの自分の家に來い」と云つて呉れたのですが、キールは兎も角、ハッレはお母さんの所でずい遠慮して居たのですが、昨夜も又さう云つて來い來いと云つて呉れますので、これも親切に甘へる事にしました。22日か23日頃迄標本を見て、伯林に歸つて宿を片附けて荷物を日本人會か何處かに預けて、ハッレで「ワイナハテン」をやつて、キールのリーケ君の家で「ジルヴェスター」をします。お正月にはキールでプロイティガムと云ふ海軍大佐が兎狩りに連れて行つて呉れるさうです。それからケオルン、フランクフルトと又見學を續けます。筆が外れましたが、昨夜はリーケ君達8時半の汽車で歸る歸ると言ひ乍ら、遂に12時過ぎ迄話をして居て、漸く歸りました。そんな譯で昨夜はよう書かず今夜にな

つてしまひました。

今日は研究室で Wittmaack 教授が精神科の助手に例の聴器の標本を説明されると云ふので、その時同席して説明を聞きました。その前に朝の挨拶をする時に、手短かに高原君の實驗の話をしてその成績と所見が全く一致して居るので大變面白いと思ひました、と申しますと「その論文をもう發表しましたか」との事、「1月に出版されるから、出版されたら貴下の所に直ぐ差上げる筈です」と申しますと「「ザルコーム」か、ふむふむ是非見たい」との事で又、「貴下があつた標本に興味があるなら、標本を上げやう、唯あれは Serien だから「ラボランティン」に云つて Zwischenschnitt を羨らでも必要だけお取りなさい」との事で、之は實は欲しいと思つたのですが、頼んで見様かなと思ひ乍ら遠慮して居たので實に有難く思ひました。（早速、午後捜し出して今日は「ヘマトキシリン」に入れて歸つて來ました。明日は久し振りに染色です）精神科の助手に色々説明しながら標本を見せて、その内小生が話したばかりの高原君の實驗を話して、成績が一致するさうだと紹介して居られました。（聴器の所見は昨夜書いた通りでした）それから精神科から持つて來た腦の標本を見ましたが、これは Medulla 全體を切らないで、唯一部分を切つた標本で、全體切れれば Octavus の中樞系路、核等の變性を檢べられて面白いのと思つてゐますと、W 教授もそう云つて Bedauerlich! Bedauerlich! ねさうだと小生の方を向いて、「日本でもさうするだらう!」と云つたりされました。手術當時は Kleinhirnbrückenwinkeltumor の診断の下に開放して見ると、Liquor ansammlung があつたので Cyste だと思つたのですが、3日後死亡して剖検して見ると、唯その部分の Arachnoidea が肥厚（反對側迄）してゐるだけであつたのだが切つて見ると、矢張腫瘍で

診断はよく解らないが、主任教授は Chorioideal papillom 又は Carcinom ではないかとの意見だと云ふ事、矢張り腦腫瘍の組織的診断は難かしいのだと思ひました。Protokoll と對照しても一度見ると診断上参考になる點が多々あり、後で精神科の助手に臨牀症狀等を少し質問しましたが、私が少し腦をいぢつた事がある事を話しますと、喜んで是非來いと行つて呉れましたので、その内行つて標本を見せて貰ふ積りです。

又 Wittmaack 教授は以上の例に能く似た内耳所見を持つて居る例として（これも Kleinhirnbrückenwinkel tumor—これは Neurofibrom これは 10月に頂いた先生の御手紙にありました。例の Acta に出てる論文に書いてある例です）一つ Serien を見せて下さつたので見ましたが、これもやつても好いとの事で、喜んで頂戴しました。（何れ歸りましたら御覽を願ひます）そしてその時、終りに Mein Cheffprofessor hat mir geschrieben und ist jetzt begeistert, durch Ihren Artikel, den sie im Acta im jorigen Jahre geschrieben haben. Darin haben Sie den Resultat des Experimentes von Hosomi einerkannt. と言ひかけますと「Ja! Natürlich! Das ist aus Prof. Tanaka's Klinik! Nicht? と大きな聲で言はれそれから獨逸の學者は今や皆研究に疲れて居る、自分獨りで頑張つて居るんだが、どうも之に對してさへ無理解なものが多くて困る、だから自分は獨逸の専門雑誌には決して自分の論文は載せないんだ、日本の學者は仲々能く Wissenschaftlich に研究する、近頃は仲々良い「アルバイト」が出る。田中教授にどうぞ宜しく den schönen Gruss von mir を傳へて呉れとの事で御座いました。

どうも長々となりまして、まだ書き度い事はありますが限りがありません、之で失禮します。時節柄特に御自愛を祈ります。 敬具。